

学生の記録から見える親子の変化と学生の気づき

高橋 弥生

(人間学部子ども学科)

The parent and child's change and student's regaining consciousness seen from student's record

Yayoi TAKAHASHI

(Department of Child Studies ,Faculty of Human Science)

保育者にとって、子どもや保護者の些細な変化に気付く力は重要な意味を持つが、その力は自然に身につくものではない。日ごろからの意識が必要であるが、学生には難しい問題である。そこで、学生の気付く力を育てる課題として、「街で見かけた気になる親子」と題したミニレポートを毎週（計10回）提出することを求め、その効果を検討した。結果として、10枚続けることで観察することが苦ではなくなり、自ら親子の姿に目を向けるようになったという学生の感想が多く、ある程度の効果は得られたと思われる。また、学生が提出してくるレポートには、生々しい親子の姿が記載されており、その分析をすることにより、現代の親子の問題が垣間見える結果となった。特に、最近ではスマートフォンに関わる親子の問題が多く報告されることとなり、今後の子ども達の育ちに不安を残すものとなった。

キーワード：親子の姿、学生レポート、気付く力、スマホと社会性、親のマナー

はじめに

近年、家庭での育児能力の低下が問題視されるようになり、親に責任を負わせているだけでは子どもの健全な発育が保障されない状況が生まれている。保育現場では、子どもの成長のために家庭との連携が欠かせないのであるが、親になりきれない親、育児に対して大きな不安を持っている親などが目立つようになり、いつしか子どもの保育を行っているだけでは立ち行かなくなってしまう。このような親準備性といわれる力の不足は、乳幼児と関わる経験の不足から生じていると言われている（伊藤2010）。平成11年に改訂された保育所保育指針には、保育所における子育て支援について示されるようになり、保育士等は子どもの保育だけでなく保護者を

支援するように求められるようになった。そのため、保育士養成課程にも必修科目として家族援助論(現・家庭支援論)が組み込まれるようになったのである。

しかし、卒業したばかりの新人保育士が、保護者に適切な支援を行うのはほぼ不可能に近い。というのも、保育士を目指す学生自身も、実習以外では乳幼児に関わる機会が少ないからである。実習だけでは、痼癢を起した子どもの対応方法を身に付けることも、子どもに泣かれて困る親の心情を理解することも難しいだろう。そこで、少しでも子育ての実際を身近に感じ、知ってもらうために、街中での親子の様子を観察し、自分なりに考察する機会を学生に与える試みを行った。それにより、学生の親子に対する意識の変化を確認してみたい。同時に、学生が見た親子の実態についても報告し、10年間の親子

の姿の変化を概観するとともに、現代の親子の抱える問題を把握する機会としたい。

1. 目的

① 学生の「気づく力」を養うこと。

保育現場では、些細な子どもの様子を見逃したことで、大きな問題に発展することがある。子どもや保護者の変化にいち早く気づく力を備えることは、保育者にとって非常に重要な問題である。

② 学生の視野を広げる。

保育者が関わる子どもや保護者は、それまでの自分の人生経験だけでは測れない背景を持っているものである。他者の見つけた親子の姿を聞くことで、自分自身の視野を広げ、親子の抱える背景を理解しようとする姿勢を持てるようになることを目指す。

③ 10年間の親子の姿を分析し、その変化の様子および現在の親子の問題点を把握する。

社会環境の変化は、親子の生活状況にも大きく影響を与える。10年間の変化を確認することは、現在の親子の抱える問題を把握する機会になると思われる。

2. 研究方法

(1) 「親子の姿」の収集

「親子の姿」の収集には、2008年から2017年までの10年間に「保育内容演習（健康）」の授業内で実施した「街で見かける気になる親子」という小レポートを用いている。レポートは全部で10回提出するが、成績に加算されるため9割以上の学生は10回すべて提出している。学年により人数に差があるが、少なく見積もっても毎年120名以上は10回すべてのレポートを提出しているため、10年間の総計は12,000件以上である。学生への指示は以下の通りである。

（レポート課題の指示内容）

- ① 通学時やバイト先、休日などに見かけた親子の姿をレポートする。祖父母と孫でも良い。また、親子の年齢は問わない。
- ② 気になったエピソードを書く。その際、親子の推定年齢、曜日、時間、場所を記載する。

- ③ 気になった理由や自分が感じたこと、自分の意見を記入する。

(2) 学生の感想文の分析

15回目の授業で、レポートに対する感想を自由記述で記入してもらう。その記述をもとに、学生の変化を分析する。なお、感想を記入したのは平成29年度の受講生全4クラス中の3クラス分であるため、回答者数は89名である。

(3) 「親子の姿」の分析

レポートの内容をもとに、親子の姿を分類した。

例えば、「スマホ育児」「マナー問題」といったタイトルを付け、出現頻度の高い「親子の姿」に注目した。その際、10年間を2期（2008～2012年・2013～2017年）に分け、そのうえで、各期の「親子の姿」の傾向を分析することとした。

3. 倫理的配慮

授業初回の課題説明の際に、コピーを取ること、研究資料として使用する可能性があることについて説明を行い了承を取っている。コピーを取られない場合、また授業内で取り上げられない場合は、申し出るように説明を行っている。

また、論文中に引用する学生のレポートに関しては、個人や地域が特定できないように留意している。

4. 学生の意識の変化

「保育内容演習（健康）」の授業は、平成28年度までは2年次の秋学期開講である。この時期は、受講しているほとんどの学生が、直前の夏休みに初めての保育所実習（2週間）を終え、子どもと関わる難しさと面白さ、保育業務の厳しさと魅力などを実感している。平成29年度については、春学期に開講されたため、実習直前ということで授業にも熱が入っていたように感じる。

第1回目の授業の際に、課題について説明を行い、記録用紙を配布する。記録用紙はA5サイズで、分量としてはさほど多くない。しかし、学生にとっては毎回提出すること、10回分の提出が求められる

ことが大きな負担に感じられるようである。毎年最初の授業では悲鳴が聞こえてくる。しかし、回が進むにつれて、レポートを書くことに対する負担感は少なくなるようである。3年生以上のレポート経験者に負担感をたずねると、ほとんどの学生が「最初は不安だったが、あまり大変さは感じなかった」といった回答をしている。

第3回目以降は、前週に提出されたレポートから、全員で共有したい内容を教員が読み上げるのだが、教員の取り上げ方次第で学生のレポート内容に偏りが生じる場合がある。例えば、スマホ育児に関するレポートを取り上げると、翌週から同様の内容が増える。親の良くない姿、育児に困難を感じて苦労している姿、マナーに欠ける親子の姿等、批判的なレポートを取り上げすぎると、学生は批判的な視点でのレポートになりがちであった。そのため、意識的に、子育てを楽しんでいる親の姿、上手な関わり方をする様子、といった親の姿を取り上げるように配慮する必要があった。しかし、毎回読み上げる効果は高く、友人が見つけた親子の姿から、自分自身も様々なことを考えるようになっていく。

(1) 気づく力の高まり

レポートを実施したことにより、親子を観察する意識が高まりよく見るようになった、と回答している学生は62名(69.6%)である。以下は学生の記述である。

感想①

最初は10回分も書くエピソードあるかな、と不安に思っていたけれど、徐々に書かなければという使命感が無くなり、気が付けばまわりの親子の様子を気にするようになっていた。親子を見つけると、すぐにイヤフォンを外して会話を聞いたり、前の自分ならやらなかったのに、レポートがきっかけで周囲のことに敏感になった。

感想②

意識を少しするだけで、普段目にすることができない細かいところまで見つけることができた。いつもは本を読むか、携帯を見て過ごしている電車や、ぼーっとしているバイト中にでも、意識を変えるだけで発見がたくさんあった。これから実習に行くことが多くなるので、その時に子どもの

様子を観察するための準備としてもいい機会だった。

感想③

街中で親子に注目して観察することは意外と為になりそうです。幼稚園や保育園では見れないかもしれない素の姿をみれるからです。もうレポートはないけど、気になる親子を見つけると自然に頭に状況をメモしている自分がいて、10回ほどでそのような習慣になりました！

多くの学生が同様の感想を述べている。これまで通学電車は眠るかスマートフォンを触る時間になっていた学生が、課題というきっかけにより周囲を意識するようになっていく。意識をすると、これまで気付かなかった親子の姿に気付き、レポートにまとめるために親子の様子を観察し、その姿に思いを巡らすのである。

(2) 視野の広がり

授業時に紹介される他者のレポートを聞くことで、新たな親子の姿に気付くきっかけにもなっている。

他者のレポートが参考になった、考えが広がった、といった内容の回答をしている学生は33名(37.1%)であった(気づく力、との重複あり)。

感想④

他の人のレポートを聞いて「こんなひどい親がいるのか」「こんな大人がいるのか」とネガティブな部分に気が付くことができた。その一方で、同じくらいのほっこりする話や可愛いエピソードなどがたくさんあり、視野が広がったように感じる。

感想⑤

家庭によって育て方や考え方も違うため、私がありえないと思うことは他の家庭によっては当たり前のことだったりする。様々な価値観がある中で、保育者の立場になった時に一人ひとりの親子の気持ちを知ることはとても重要なことだと思いました。あの親子は変だな、と思ったとしても、どうしてそうなったのか気持ちを考えることが、次の私たちの課題になっていくのではないかと思います。

本課題の2つの目的に対して、多くの学生からある程度評価ができる回答が得られた。ここに取り上げた以外にも、実習への効果の期待、保育者として子どものモデルになる意識の芽生え、可愛いだけではない様々な子どもの姿、自分が親になる時のイメージ作り、などに関する感想が多くあった。

課題に対して批判的な意見は1名であった。内容としては、「親子に出会えないためにレポートが書けない」というものである。親子と出会えない、と記入している学生は、この1名を含め3名である。アルバイトなどにより、生活時間帯が他の学生とは違うことが理由であった。今後このような学生が増加するのであれば、課題の内容を工夫する必要があるのかもしれない。

4. 10年間の親子の変化

学生が見かける親子の姿は、10年間（2008年～2017年）の間に少しずつ変化が見られる。以下、レポートでの出現頻度が高い、特徴的な親子の姿を挙げ、変化を見ていきたい。

(1) 2008年～2012年の状況

ア) 夜遅く見かける親子

2008年はこの課題を大学で取り上げた最初の年である。どのような親子の姿がレポートされるのか期待していたところ、心配な状況が次々に報告された。それは、夜遅い時間にもかかわらず飲食店などで見かける小学生以下の子どもと親の姿である。

事例①

3歳くらいの子どものを連れた二組の親子を居酒屋で見かけた。19時頃に来店し、23時過ぎになっても帰らないのでとても驚いた。子どもはその時間でも元気だったことから、普段からこのような生活リズムなのだろうと感じた。親は若かった。

子どもの就寝時刻が遅くなっていることについては以前から問題視されており、谷田貝・高橋（2005）においても就寝時刻の遅れが報告されている。しかし、学生の目を通して報告された姿は、夜遅い生活に慣れてしまっている子どもと、その生活に対して全く問題意識を持っていない親の姿であった。早寝

早起きに関しては改善の傾向がみられるとの報告もあるが（ベネッセ2015）、この頃、早寝早起きとは無縁の生活をしている親子がかなりの数存在したことは事実であろう。最近の居酒屋では親子連れの利用を歓迎し、親子向けのサービスも出現している。しかし、社会全体としてそのような親子を規制する動きはほとんど生まれていない。そのため、その後のレポートでも10年間を通して同じような姿がたびたび報告され続けている。

イ) マナーの問題

マナーについては、主に親のマナーの問題である。親の意識が薄いゆえに、子どもがマナーのない行動をしてしまうという姿が目についた。

事例②

電車の中で3歳ぐらゐの男の子とお母さんが座席に座っていました。しばらくして子どもが飽きてしまったのか、靴のままで椅子の上に立ち上がり落ち着かない様子でした。それを見てもお母さんは何も言わず、子どもに好き勝手にさせていました。その後座る人や周りの人たちのことを考えたら、子どもにきちんと注意をすることが大切だと思います。

電車内でのマナーに関しては、通学途中で見かける機会も多く、同じようなレポートが多かった。特に土足で座席に立っている、という事例は驚くほど多く、親自身がそのような常識を持ち合わせていないのではないかと疑うほどであった。事例②に書いているように、次に座る人のことを考えることが少なくなっているのかもしれない。ちょうど、電車の中での化粧が頻繁に見かけられるようになったころに10代後半であったと思われる世代が親である。電車の中は、自宅の延長のような意識があるのかもしれない。

マナーについては、飲食店での姿も多く報告されている。その代表的な事例が次のものである。

事例③

ファミレスで、2～3歳ぐらゐの子ども二人と両親の4人を見かけた。子ども一人はぐずっていて、椅子の上に靴のまま上がり込んでいて、料理を待っている間も席を離れ、店内を走り回り大きな声を出していた。食べ終わった後、両親は話し

込んでいて子どもは放置。子どもたちは売店のおもちゃで遊んだり、走り回ったりとやりたい放題だった。

ファミレスだけでなく、様々な飲食店での子どもの常識はずれな振る舞いが報告されたが、責任はもちろん親にある。店側はほとんど注意をすることは無いようで、マナーの無い親子の姿についてのレポートも、10年後の現在でもかなりの数が報告されている。最近では、使用済みの紙おむつを座席に放置して帰るというマナー違反の報告もあり、改善はみられていない様子である。

ウ) 友達親子と子どもをペット扱いする親

最近では学生から、「親と仲が良い」という話を聞く機会が増えたと感じる。仲が良いことは悪いことではないが、中には恋愛の話までも相談しているということもある。親子の距離が非常に近くなったのではないだろうか。それは、子どもの方が親に近づいているのではなく、親が子どもに近づいているのである。親が子どものことは何でも知っておきたい、知らない不安、といった気持ちになると、子どもからなんでも話してもらうために友達のような関係を築こうとするのではないだろうか。理解ある、友達のような親、なんでも話せる親でありたいという気持ちは、裏を返せば子どものすべてを把握し、子どもを支配したい、という気持ちがあるのかもしれない。また、かわいい姿のままでいてほしい、自分の好みの姿でいてほしい、という親の様子もある。まるで子どもをペットのように扱っている印象である。友達親子と子どもをペット扱いする親は、どちらも子どもを支配下に置きたいという気持ちの表れであるように考えられる。このような親子の事例を次に挙げていく。

事例④

電車の中で4歳くらいの女の子と30代の母親を見かけた。母親はミニスカートと長いブーツを履いて、派手な様子であった。4歳の子どものも、スカートとヒールの高いブーツを履いていた。4歳くらいなのに高いヒールを履かせて、けがをしては大変だし、すごく歩きづらそうだった。

事例⑤

水族館に2歳と5歳くらいの兄妹がいた。母親

が子どもと魚と一緒に写るように写真を撮っていた。母親は子どもに「動かないで!」「こっち向いて!」と少し怒り口調で子どもに指示を出していました。妹は、おなかが空いた、と騒ぎ、兄も疲れている様子でした。

⑤の事例では、母親は子どもの実態より写真の出来栄えに気持ちが向いている。まるでペットの写真を撮るかのように、子どもの写真を撮っているのである。SNSへの投稿が盛んになっている最近では、このような事例は増加してきている。

エ) 子どもから目を離す

この事例は、学生の日から見ても安全面に不安があり、事故や事件に発展しかねないのではないかと内容である。しかし、非常に日常的に目に留まるようで、最近のレポートでも良く見かける事例である。

事例⑥

日曜日の昼、少し混雑したショップ(20~30代女性向け)の中心あたりにベビーカーがぼつんと置いてあった。中には0歳くらいの赤ちゃんが眠っていたが、近くに親らしき姿は無い。その後、自分がお店を一回りして戻った時に、やっと両親らしき二人が戻ってきた。親が二人いるのだから、分担できたのではないだろうか。

大型のショッピングモールでも、街中のスーパーでも、同様の姿が報告されている。時には自転車の子どもの椅子に乗せたまま、親が買い物に行ってしまう事例もある。それを目にした学生は、誘拐や転倒などを心配するのであるが、親自身は少しの時間だから大丈夫と考えているのであろう。この姿もまた、最近になっても減少している様子は無い。

(2) 2013年~2017年の状況

2013年は、スマホにまつわるレポートが急増した為、この年から2017年をまとめてみることにする。ただし、携帯電話やスマホの事例は以前から学生からの報告が出ており、同様の姿がこの年に増えてきたと判断するべきであろう。

ア) スマートフォンの弊害

20~30代にとって、スマホの登場は生活習慣を

変えるほどの大きな影響があったのではないだろうか。子育ての場面においても同様で、携帯電話の時代にも少なからず報告されていた姿が、爆発的に増加している。それは、スマホに夢中になり子どもが目に入らなくなった親の姿である。

事例⑦

交差点で見かけたお母さんは、右手にスマホ、左手で子どもが乗ったベビーカーを押していた。4歳くらいのお兄ちゃんが母親の服を引っ張ったりして話しかけるが、スマホから目を離すことはなかった。信号を渡るときも、スマホから目を離さず、子どもの方も見ていなかった。

このような事例は山ほどある。時には話しかけた子どもが「うるさい」と叱られてしまう事例もある。親がスマホ中毒になりつつある状況が、街中では多く見かけられるのである。そして、そのレポートを書いている学生もまた、スマホ中毒になりつつある。どうしたら歯止めがかけられるのか、真剣に対応する必要を感じる。

スマホに関しては、2013年以降子どもにも使用させる場面が目立っている。学生のレポートでは、テーマパークなどでの順番待ちや電車等での移動の際に、子ども向けアプリや動画の利用をしているという報告が多い。せっかくの親子の時間を、スマホに奪われていてもったいないのではないか、という印象を受けているが、親にしてみればスマホを渡しておけば静かにしていただける、大変便利で楽な道具なのである。そのため、今後減ることは無いのではないと考えている。

イ) 周囲に気を使う親

前述したような親の様子意外に、学生のレポートが目立つようになってきたのが、周囲を気にしている、周囲の目が気になる親の姿である。

事例⑧

平日の15時ころ、ベビーカーの赤ちゃんとお母さんが電車に乗ってきたが、赤ちゃんが大声で泣き出してしまった。しばらくしても赤ちゃんは泣きやまず、お母さんは焦っているように見えた。周りの人は「うるさい」というわけではなかったが、だからと言って優しい言葉をかける人もいなかった。みんなあまり見ないようにしている雰囲気

気だった。赤ちゃんが泣きやまないのも、途中で降りて駅のベンチに座っているようだった。

電車の中では、周囲の迷惑に全く気持ちを向けない親と、必要以上に周囲に気を使う親の両極が気になるところである。特に親が一人で子どもを連れてくる時、泣いたりぐずったりした際に周囲からの視線を気にしている親が少なくないことが、学生の報告数からもうかがえる。時には他の乗客に怒鳴られたり舌打ちされたり、といった不快で怖い思いをする親もいるようである。レポートには、年配の女性に理不尽に叱責されて泣いてしまった母親の姿もあった。このようなことがあるなら、スマホで静かにさせていたほうが良いと思うのも当たり前なのであろう。

《おわりに》

授業内の課題ではあるが、10回の小レポートを書くことで、学生はいつしか周囲に目を配り、親子の様子に気付くようになってきている。保育者に必要な、気付く力を養うには適切な課題であったと感じる。しかし、課題が終了すると学生は親子の姿に目を向けなくなってしまふ可能性もある。この意識が定着するには、どのような働きかけが必要であるか、今後も検討していきたい。

記載内容については、保育を学ぶ学生は子どもにとってマイナスの関わりとを感じる場合に目を引かれるようで、親に対して批判的なレポートが多かった。

2008～2012年は、周囲のことを気にせず親の楽しみを優先する状況が目立っていた。ゆえに、夜遅くまで親の遊びに付き合わされる子どもの姿がレポートに多く登場している。

しかし2013～2017年は、スマートフォンの普及が大きな問題となって出現した。スマートフォンに気を取られ、子どもに意識を向けていない親の姿が浮き彫りになり、コミュニケーション能力や社会性の発達に望ましくない影響が出るのではないかと危惧される。また、直近の2年ほどは、周囲に気を使う親子の姿のレポートが多くなってきている。子育てに冷たい社会の姿が垣間見え、子育てを負担に感じてしまう一つの要因となっていると感じる。

今回は学生のレポートについて概要を捉えて報告したが、傾向がさらに明確になるような分析が必要であろう。また、社会的背景との関連も確認する必要がある。これらについて詳細に分析することを今後の課題にしていきたい。

《参考文献》

- 伊藤葉子・倉持清美・岡野雅子・金田利子（2010）
「中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発

達とその影響要因」『日本家政学会誌』Vol.61
(3) ,pp.129-136.

- 谷田貝公昭・高橋弥生著（2005）「睡眠の習慣の発達基準に関する研究」『青少年育成研究紀要』Vol.5,pp.5-17.
- ベネッセ教育総合研究所（2015）「第5回 幼児の生活アンケート」
<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4770>（2017/10/6）
(受付日:2017年10月30日、受理日2018年1月21日)